

「 花火大会と祖父 」

神奈川県 厚木市立厚木第二小学校 6年 <sup>いけうち</sup> <sup>けん</sup> <sup>と</sup> 池内 健利

「全部だ。全部飲みこまれてしまった。人も家畜も家も、畑も田んぼも、村ごと全部が、飲みこまれてしまった。」

「そんな怖くて恐ろしい話、今日する必要あるの」と、ぼくは思った。

夏休みに入ってしばらくすると、ぼくの家では、リビングの真ん中にあるソファとテーブルを端によせて、お客さんを迎える準備をする。

毎年、この準備が始まるとぼくも妹もワクワクした気持ちになる。

それは、ぼくの住んでいる厚木市で、とても大きな花火大会が行われるからだ。新せき、父と母の友人家族、毎年決まったお客さんがぼくの家に来て来る。

ずらりとならんだ夜店の灯りと、おいしそうな匂いにつられて、ぼくは、焼きそばと、リンゴあめを買った。

そして、花火見物が終わると、毎年誰かが必ず言う。

「河川敷での花火大会は最高だね。」

「河川敷での花火大会は風情があって良いね。」と。

すると、祖父が決まってこう返事をする。

「川は良いと思える時もあるが、怖いぞ。」

祖父の父、ぼくのひいおじいさんは、大雨による川の氾らん、土砂に埋もれて亡くなってしまった。ひいおばあさんも、おばさんも、そしておばさんの子供も。

昭和 42 年 8 月、「ぼつり、ぼつり」と降り出した雨は、次第に強くなって、目の前が見えないほどの激しい雨になった。雨風の音と川の音が「ゴーゴー」となる中、高台へ避難しようと玄関を出たその時、家の屋根を超す大きな山のような濁流に足をすくわれた。

皆で固くつないでいた手も、もぎとられる勢いではなれ離れになって、次々と真っ黒な濁流に飲みこまれていったようだ。

ぼくは、思った。

「そんな怖くて恐ろしい話、今日する必要あるの。」

なぜ、祖父は毎年、皆がにぎやかに集まる花火大会の夜に、決まってこの話をするのだろうか。

祖父の話が始まると、ぼくは怖くなる。

羽越災害は、日本の災害史に残る水害だった。低気圧が、あいついで停滞前線を通る際に、山形・新潟県堺の地域を中心に大雨となり、土砂災害が発生して、多数の死者、行方不明者をだした。

「ぼつり」と降り出したいつもと変わらない雨が、まさか村ごと土砂に埋まるような大災害になるとは、村の誰もが思っていなかったようだ。

そして、祖父は言った。

「ぼつり、と雨が降り出したら、この話を思い出して欲しい。」と

人は自然の中で暮らし、自然の恵みを受けている。だから、誰もが自然災害を避けることはできない。

目の前にならぶごち走も、さっき買ったばかりのリンゴあめのリンゴも、自然があってこそ手に入るものだ。

森林ばっ採や自然環境の破壊が、土砂災害を引き起こすと学校で習ったことを思い出した。

祖父の話の怖い恐ろしいと思って避けるのではなく、これからは、もっと色々なことを聞いて知ることが大切だと思った。

今日もテレビで、大雨、土砂災害のニュースが流れている。夏のこの時期だからこそ、祖父は自然の怖さ、土砂災害の恐ろしさを伝えたかったのだろう。

「ぼつり」と降り出した雨を、ただの雨だと思ってはいけぬ。

今年は、いつもの夏とは違った気持ちで祖父の話の聞くことができた気がする。